

序

『立命館アジア・日本研究学術年報』第7号をお届けします。

毎号のことではありますが、本号ができあがるまでに、執筆・査読・編集・刊行などのプロセスにおいて、多くの皆さまのご協力とご支援をいただきました。また、ご愛読いただいている皆さまからも、さまざまな形で励ましをいただきました。心より御礼申し上げます。

昨今は、AI 革命が進行中で、本誌の編集委員会・編集部でも、その動向を注視しつつ、それが学術の今後にどのような影響を及ぼすのか、真剣に考えたり議論したりしております。率直に申し上げて、論文を執筆する側が AI をどのくらい使っているのか、それは許される範囲なのか、という議論はあちこちでされてきましたが、現在の大きな問題の1つは、査読サイドが AI を用いるという現象かと思います。幸いにして、本号の査読過程はその問題と縁がありませんが、学术界全体の問題として、たとえ「道具」的な使い方にとどまって査読者の学術的なスタンスには関わらないとしても、執筆における AI 利用に目を光らせなければならない査読サイドとしては、この問題は看過できないと思います。

他方、若手研究者が AI の普及によって自分たちの研究の独創性が侵される危機を感じているという問題については、本誌では、研究サイドの立場として、それほど深刻には受け止めていません。というのも、アジア・日本研究は、フィールドワーク、原典の史資料などに依拠し、研究者個々人が異文化に対する感性を研ぎ澄ませて、自らの主体に依拠して対象を捉えることに立脚しており、その限りでは集積された知の活用による AI に簡単に負けるとは思えないからです。

むしろ、AI の側で、人類知の拡大をもたらす、そのような研究者たちの新知見を必要としているのであり、新知見が AI を通じて社会に吸収され、一般化していくとすれば、それは必ずしも悪いことではないように思います。

その意味では、本誌も本研究所も、愚直なまでに学術の原点に立ち返りつつ、フィールドワークや原典研究を積み重ね、自らの感性を研ぎ澄ませることで新知見を得て、学界と社会にそれを学術的な「発見」として還元する営みを続けたいと思います。また、厳密なダブル・ブラインドのピア・レビューに基づく査読制度も、堅持していきたいと思います。

そのため、本誌はこれまで多くの優れた査読者の先生方に助けていただけてきましたが、引き続き、査読者になっていただく皆さまにご貢献とご負担をお願いしなければなりません。引き続き、よろしくお願い申し上げます。

さて、立命館大学では、「学園ビジョン R2030 立命館大学チャレンジ・デザイン」というビジョンを掲げ、次世代研究大学をめざして日々、努力を続けておりますが、2026 年度から研究高度化のための「第5期中期計画」が始まりました。この新しい中期計画の中で、立命館アジア・日本研究機構のこれまでの成果は、新機構として立ち上がる立命館未来共創研究機構に発展的に吸収されることになっています。その一方で、アジア・日本研究所は、立命館大学内の常設の研究所として、活動を継続いたします。

本誌は、「立命館〔における〕アジア・日本研究〔の〕学術年報」という題名の通り、立命館学園におけるアジア・日本研究の現況と成果をお知らせすることをめざしており、論文、研究ノート、研究報告を掲載するほか、書評欄では、立命館大学、立命館アジア太平洋大学の教員・研究者が編著者や執筆分担者である、アジアや日本に関する書物を取り上げてきました。ご好評にお応えして、本誌に掲載された書評を一覧できる「書評バース」もホームページで掲載しております（https://www.ritsumeai.ac.jp/research/aji/book_review/）。どうぞ、ご覧ください。

本誌は、今号も、オンライン版（デジタル版）と、従来型のプリント版（アナログ版）で発行しております。

掲載内容は、研究論文、総説論文、研究ノート、研究サーベイ、研究報告、書評のいずれのカテゴリーでも、「学際性」「文理融合」を重視して、人文・社会科学系、自然科学系の多様な分野に対応するように努めております。なお、学際性を重視してはありますが、それと同時に、いずれかのディシプリンに特化している論文も歓迎しております。アジアや日本に関わりのあるご研究であれば、是非、研究成果の発表の場としてご活用ください。

研究所は、これからも皆さまのご声援をいただきながら、さらに、しっかりと前進していく覚悟しております。本誌を含めて、国際的なレベルでの「アジア・日本研究」を推進する諸活動にいつそうのご支援、ご鞭撻を賜りますようお願いする次第です。

2026年8月

小杉 泰

立命館大学 立命館アジア・日本研究機構 副機構長
アジア・日本研究所長、編集委員長